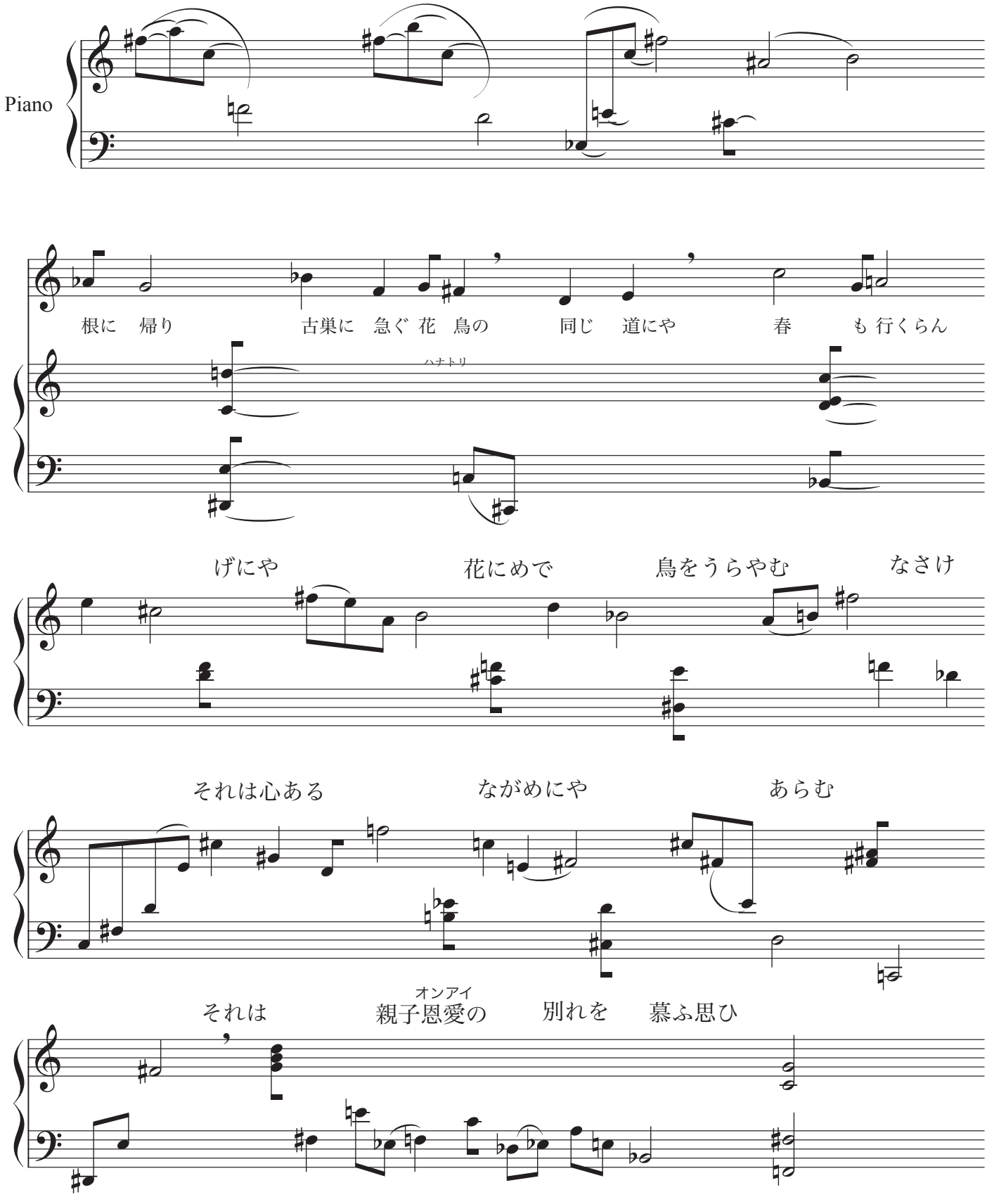
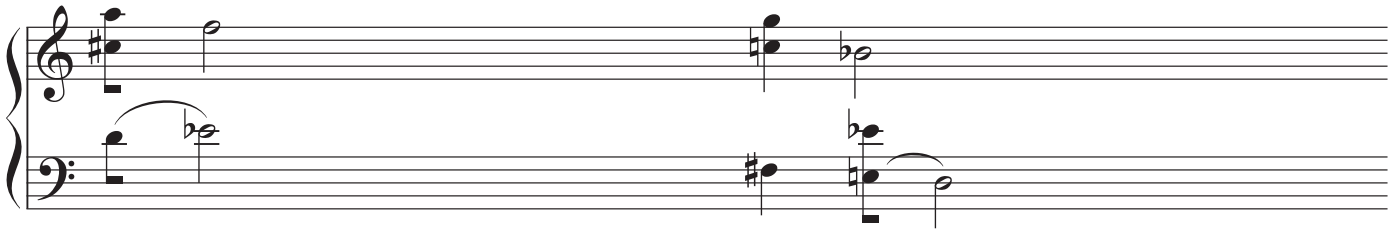
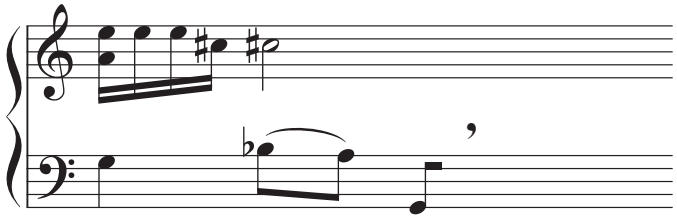
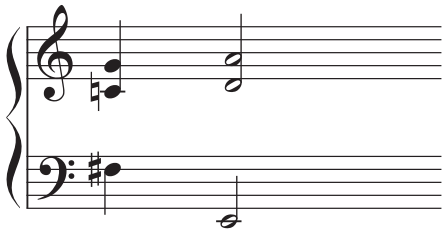
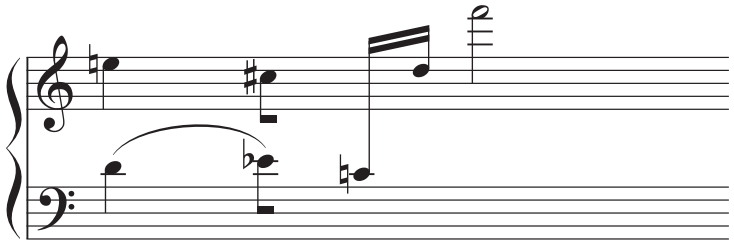
夢跡一紙（世阿弥）
(2023)

高橋悠治

やるかたもなきあまりに　　心なき(ハナトリ)花鳥をうらやみ

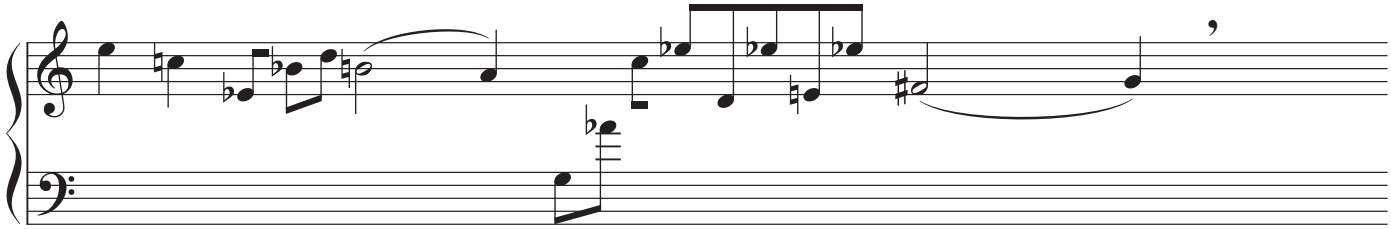


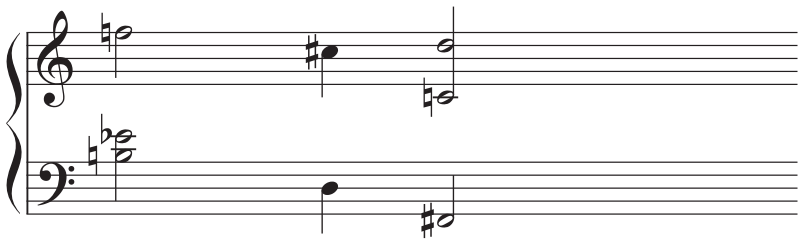
色音(イロネ)に惑ふあはれさも　　思へば同じ道なるべし



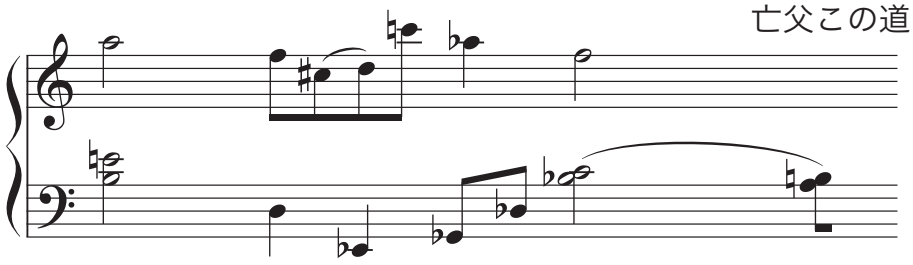
さても去(サンヌル)八月一日(ツイタチ)の日
息男善春（ソクナン）善春（ゼンシユン）
勢州（セイシウ）安濃（アノ）の津にて身まかりぬ



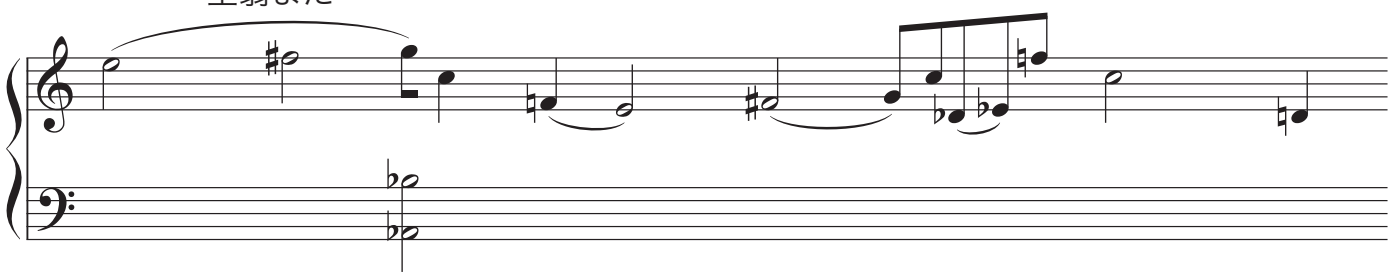
老少不定（ラウセウフヂヤウ）の習（ナラ）ひ
いまさら驚くには似たれども
あまりに思ひの外なる心地して
老心身を屈し
愁涙袖を朽（ク）たす



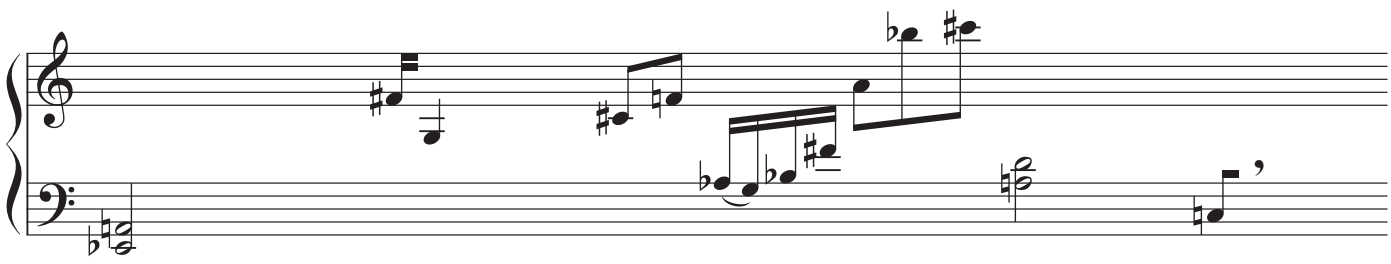
さるにても善春
子ながらも
類(タグヰ)なき達人として

昔
亡父この道の家名を受けしより

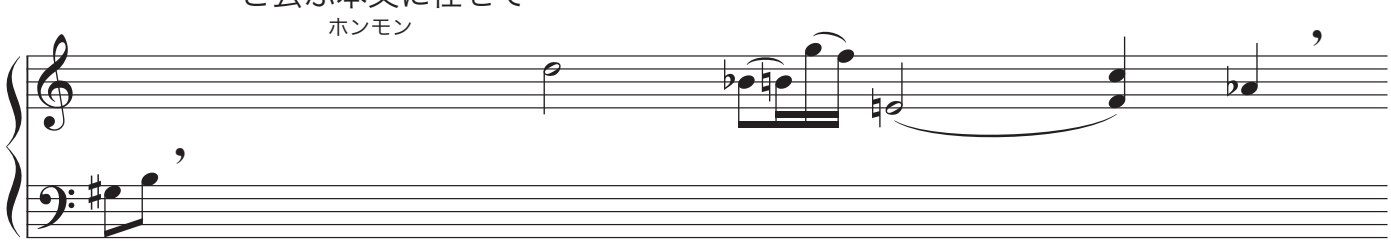


至翁(シオウ)また
私(ワタクシ)なく当道を相続して



いま七秩(シチチツ)に至れり
善春
また祖父にも越えたる堪能(カンノウ)と見えし程に



共に云ふべきして云はざるは
人を失なう
と云ふ本文に任せて
奥義(オウギ)
道の秘伝
ことごとく記し伝へつる数々(カズカズ)

イツスイ
一炊の夢となり

ムシユムヤク　チリケムリ
無主無益の塵煙となさむのみなり

今は

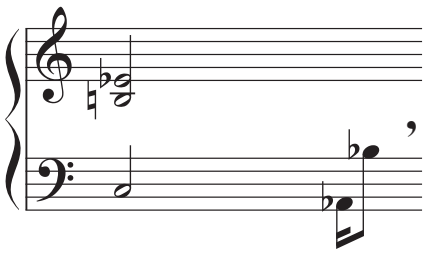
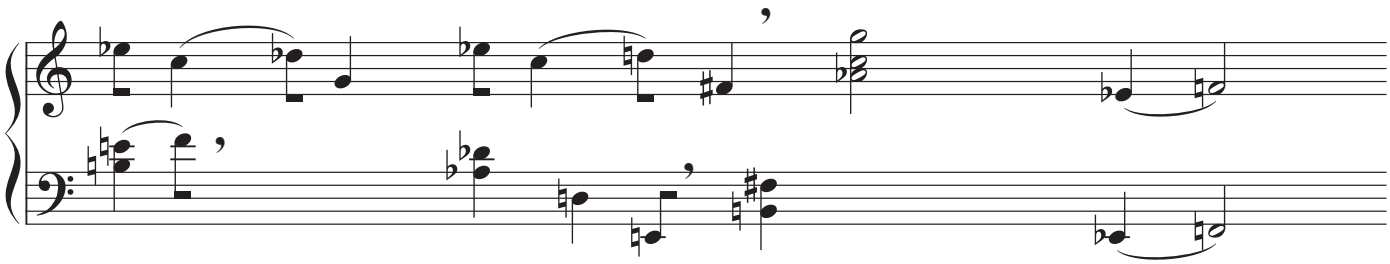
ヤク
残してもたがための益かあらむ

タレ
君ならで誰にか見せむ梅の花　と詠ぜし心

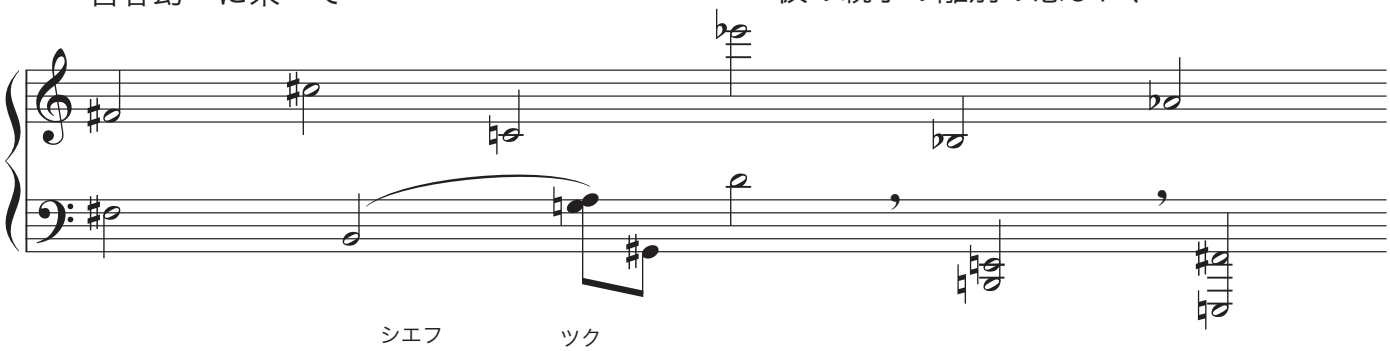
p
「君　なら　で　だれ　にか　見せむ　梅の花」

まことなるかな
しかれども

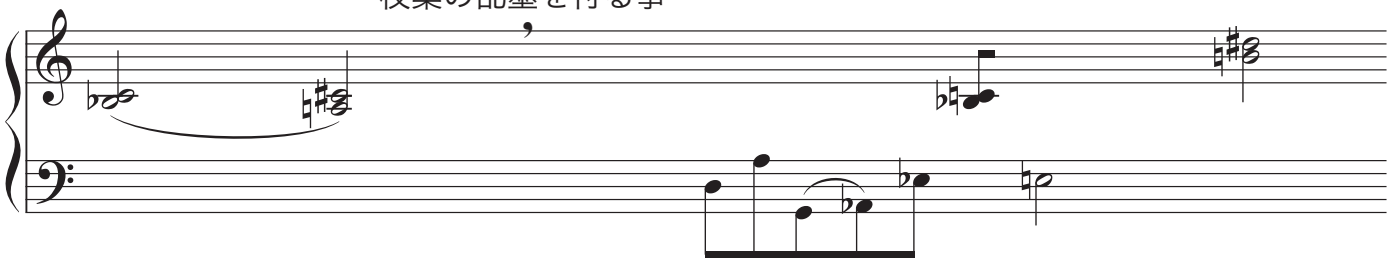
道の破滅の時節到来し
よしなし老命残(ノコツ)て
目前の境界に
かかる折節を見ること
悲しむに堪へず

あはれなるかな

孔子は鯉魚に別れて
思ひの火を胸に焼き
白居易は子を先立てて
枕間（マクラノホトリ）　に残る薬を恨む（イへ）」と云り

善春幻（マボロシ）　に来（キタツ）　て

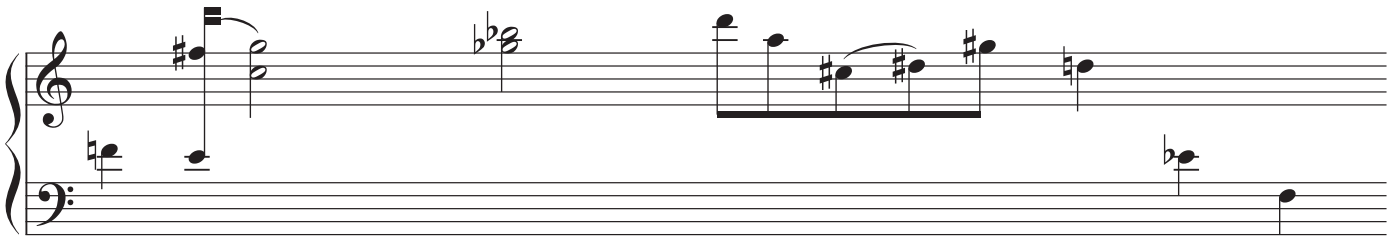
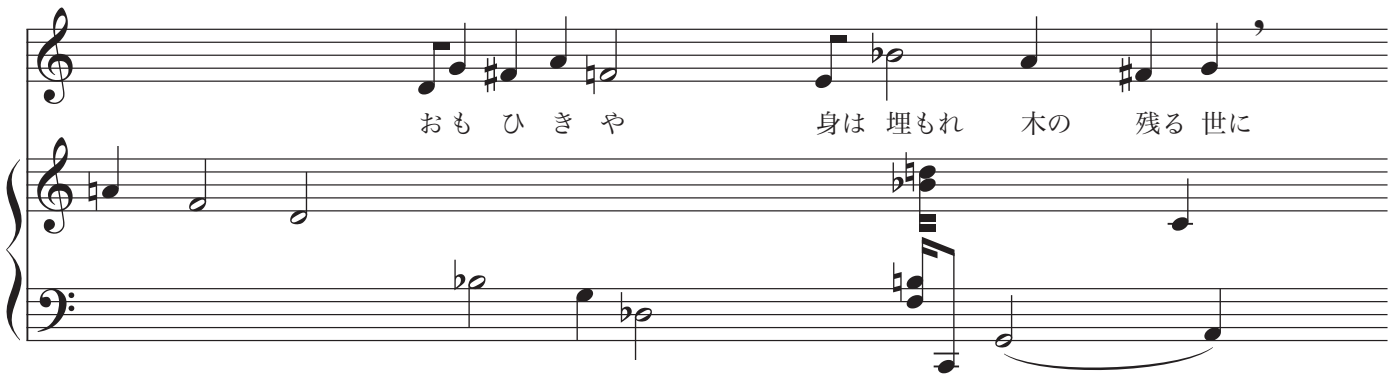
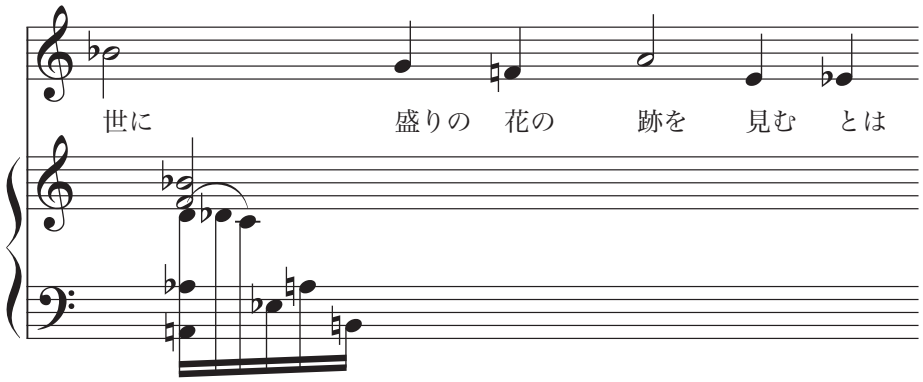
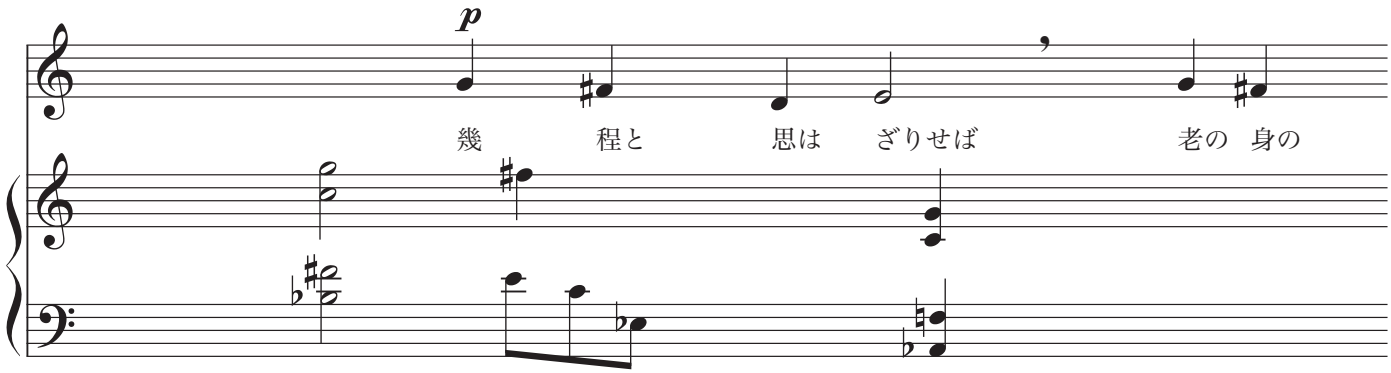
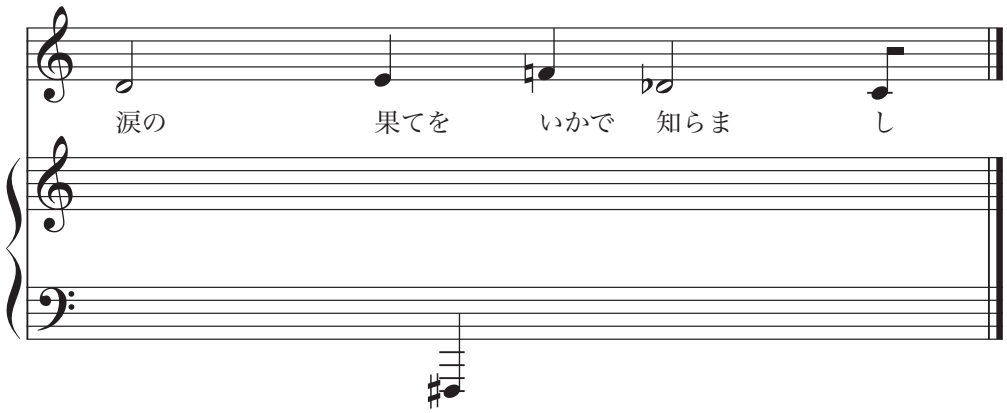
仮の親子の離別の思ひに、



枝葉（シエフ）の乱墨を付（ツク）る事



まことに思（オモヒ）のあまりなるべし



永享二々年九月　日
至翁書